

2nd

時事解説

◇昭和23年7月8日 第3種郵便物認可◇昭和53年1月24日 国鉄首都特別紙新聞紙第519号◇毎週2回火・金曜日発行(但し祝日を除く)◇発行所 東京都千代田区日比谷公園1番3号 時事通信社 電話(03)591-1111◇郵便番号100 〇時事通信社1979

時事通信

周揚氏の来日



中国の著名な文芸評論家・周揚氏が中国作家代表団長として来日し、各地で講演をおこなっている。文化大革命では、三〇年代以来、中国文芸界の「黒い糸」をあやつってきたとして激しく批判され、失脚していった周揚氏は、今日、再び中国文芸界連合会副主席、中国作家協会副主席として復活したのだが、若き日に日本へ留学したこともあるだけに、左右に揺れた中国文芸界の旗手として幾星霜を経たのちの今回の来日はさぞかし印象深いものである。

周揚氏は、各地の講演会で「四人組」時代の暗黒を語り、去る五月十五日の東京・読売ホールでの講演でも次のような要旨を述べている。

「文化大革命が始まると林彪や四人組が現れて、彼らは古代の文化、解放後のすべてを否定し、進歩的な書物の発行を禁じ、進歩的な作家を打倒した。しかし中国人民は彼らに屈服しなかった。私個人も大きな政党が権力をにぎると必ず少数の陰謀家もぐりこんで悪いことをするという法則を学んだし、同時にそれは

必ず発見されるという法則も学んだ。中国はいま、文芸の春を迎え、自由にものを言い、書くことができるようになった。訪日の目的は日本に学ぶことである」
大変結構な発言であり、周揚氏の本音だと思いが、中国で「自由にものを言い、書くことができるようになった」というのは、やはり周揚氏自身がいまや再び発言の自由を得ているというごときであり、かつて周揚氏によって批判された作家や評論家たちまでが発言の自由を得ているのではないのである。

（中国の場合、副の肩書の者が「実権」をもつことがしばしばである）、数多くの作家や評論家を激しく批判し、失脚させてきたのであった。これほどの「実権」をもちながら、党中央委員候補の地位に甘んじざるを得なかったのは、その腕のゆえにあまりにも「敵」が多かつたからだとも見られるほどであった。

（まづいもうい）
というのは、周揚氏は中国共産党の文化官僚（長く党中央宣伝部副部長、部長は陸定一氏）として中国文芸界に君臨し

かつて一九三〇年代には上海の左翼作家連盟（「左聯」）の書記として活躍し、その尊大ぶりを江青女史がいかに恨んでいたかは江青自身がロクサーヌ・ウイトケ女史に語っているところである。やがて抗日戦争の時期には「プロレタリア文学」から「国防文学」の立場に転じ、「大衆文学」のスローガンをかかげた魯迅の系統の胡風、馮雪峰、巴金らと対立ライバル胡風を「蔣介石のスパイ」として摘発、逮捕せしめたのである。やがて反右派闘争の段階では著名な女流作家・丁玲らをやはり「反党・反革命分子」として摘発した。こうした勢いに乗って六三年には中国科学院で「哲学・社会科学工作者の戦國的任務」と題する演説をおこなない、「現代修正主義」批判の先頭に立ったが、ついに文化大革命で今度は彼自身が打倒されたのである。従って、周揚氏の失脚には、他の知識人の失脚とは大きく異なる印象を多くの人がともったのであった。

建國後
の胡風
批判で

航空機騒音と自民党の党内事情……2
大平首相は愚者か賢者か
極めて高い今秋解散の可能性
大角連合で積極的推進……9
主 金のかかる新エネルギー開発(下)……13